

# 北陸スポーツ・体育学会

## 2025 年度学会大会 抄録集

会期：2025 年 11 月 22 日（土）

会場：AOSSA（アオッサ）研修室 605  
：福井県国際交流会館 第 1 会議室



## 大会プログラム

## 2025年度 北陸スポーツ・体育学会（開催報告）

期 日：令和7(2025)年11月22日（土）

場 所：AOSSA（午前）、福井県国際交流会館（午後）

## 【タイムスケジュール】

10：00～10：05 開会式

10：05～10：29 一般研究発表（口頭発表）

10：35～11：25 一般研究発表（ポスター発表）

11：25～11：35 優秀研究奨励賞の投票

13：30～15：10 公開セミナー

15：10～15：20 閉会式

## 【口頭発表（発表8分・質疑応答4分）】

<座長：出村友寛（仁愛大学）>

①小学校体育科における運動有能感が低い児童の実態と運動意欲を高める支援の在り方

金子泰子（富山国際大学）、橋爪和夫（アール医療専門職大学）、阿尾昌樹（射水市立堀岡小学校）

②ラット足底筋損傷後のアイシング処置は筋再生過程早期の再生応答を変化させる

芝口翼（金沢大学国際基幹教育院）、Muhammad Isman Sandira（金沢大学人間社会研究域）、黄钧天（金沢大学大学院新学術創成研究科）、北浦孝（金沢大学人間社会研究域）、増田和実（金沢大学人間社会研究域）

## 【ポスター発表（発表3分・自由討論27分）】

<座長：澤 聡美（富山大学）>

③福井工業大学スポーツ健康科学部におけるスポーツ指導者養成のためのPBL型授業の実践報告

山元康平、辻本典央、前川剛輝、中垣内祐一、野口雄慶（福井工業大学）

④女子トップレベル大学野球チームにおける練習構成の分析 ―練習時間および頻度に注目して―

阿部莉真、中垣内祐一、山元康平（福井工業大学）

⑤大学生アスリートのスポーツにおける不適切指導に対する認識に関する実態調査

池田聖、岡島京矢、中嶋千博、山元康平（福井工業大学）

## ⑥大学女子トップレベルゴルファーにおけるスコア分析をもとにしたトレーニング課題の評価

稲葉千乃、蟹江美羽、中田彩夏、中垣内祐一、山元康平（福井工業大学）

## ⑦陸上競技 100m 走におけるパフォーマンス停滞を克服するコーチング実践事例

岡島京矢、池田聖、中嶋千博、中垣内祐一、山元康平（福井工業大学）

## ⑧陸上競技ハンマー投における 1 ターン毎のターン時間の変化パターンの分析

中嶋千博、池田聖、岡島京矢、山元康平（福井工業大学）

## ⑨大学女子剣道選手における試合分析をもとにした個人課題の評価

小山結衣、中垣内祐一、山元康平（福井工業大学）

## ⑩夜間睡眠の質と量が午睡による運動パフォーマンス改善効果に及ぼす影響

平井秀典、前川剛輝、山元康平（福井工業大学）

## ⑪モンゴル国の脳性麻痺児の水泳指導に関する事例報告

橋爪和夫（アール医療専門職大学）、酒井重数、Jargalsaikhan Undarmaa（株ブレイン）、Nyamdavaa Enkhjargal（オルホン笑美寿エルデネット）

## 【優秀研究奨励賞 ※40 歳以下を対象】

該当なし

## 【公開セミナー】

テーマ： 障害児者への健康支援

司 会：青木宏樹（福井工業高等専門学校）

## 基調講演 1：個別最適化された教育支援とウェルビーイング

～AI と ICF による日々の生活リズム支援から考える運動・教育の未来～

シンポジスト：小越咲子（福井工業高等専門学校・電子情報工学科・教授）

## 基調講演 2：アダプテッドの視点から障害児者の運動支援を考える

～多様性を前提とした体育・スポーツの実践に向けて～

シンポジスト：村上祐介（順天堂大学・スポーツ健康科学部・准教授）

## AI と ICF に基づく教育支援とアダプテッド概念の再考

小越咲子<sup>1, 2</sup>,

(<sup>1</sup>福井工業高等専門学校, <sup>2</sup>株式会社みらいのでざいん)

多様な子ども・若者を対象とした教育支援の実践と、そこから得られる生活・行動データを基盤とした AI 活用の可能性について、本大会において報告した。近年、学校・家庭・福祉機関が連携し、学習状況、行動特性、情動変化、生活リズムといった日常状態を継続的に把握しながら支援を行う「個別最適化」アプローチの重要性が高まっている。これは支援を単発的介入ではなく、日常生活の中で循環的に更新されるプロセスとして設計する試みである。

本研究では、国際生活機能分類 (ICF) を理論枠組みとして、睡眠、生活リズム、情動調整、注意、社会参加といった生活基盤を可視化し、AI を用いてその日の状態に応じた課題設定や環境調整を行う支援モデルを紹介した[1]。このアプローチは、運動・体育分野におけるアダプテッドの理念と共通の基盤を有する。また、支援実践の一例として、認知負荷の分散を目的とした環境調整および課題設計手法について具体的に報告した。また、アダプテッド概念は、個人特性への適合にとどまらず、参加環境や関係性を含めて再設計する広義の適応が可能となると考えられる。この視点は、これまで筆者が研究・実践を通して取り組んできた内容を言語化し得る枠組みを与えるものであり、本講演はその契機となった。教育・福祉現場においても、支援対象は孤立した個人ではなく、小集団の相互作用の中で成長する存在である。実際に筆者が実践する学校・家庭・福祉機関の連携支援では、

個別最適化のみならず、小集団における役割形成、成功体験の共有、相互承認の循環が支援効果に大きく寄与している。本講演を通じて、アダプテッド概念を個人最適化から関係性適応へ拡張して捉えたいと考えるに至った。

講演当日は、参加者から発達障害支援の実践に共感的な議論が得られたことに加え、分野横断的な研究者・実践者との新たなつながりを得る機会となった。また、運動・身体活動に関する知見に触れたことで、生活基盤支援に身体活動参加の視点を統合する重要性を再認識した。特に村上氏によるアダプテッドスポーツに関する講演は、小集団連携支援の枠組みを再解釈、個別最適化とアダプテッド環境設計を統合した支援モデルの発展可能性を示唆するものであった。

AI の進展は、個人の認知特性や行動特性を精緻に把握し支援へ反映することを可能にしつつあり、従来は制約として扱われてきた特性が状況によっては資源として機能する可能性を示している。これは障害概念を個人内要因としてではなく、環境との適合関係として再構築する方向性である。これからの未来に向けて AI 時代におけるスポーツと教育支援の新たな可能性を提示するものと考えられる。

[1]IEICE Communications Society Magazine :解説記事 [https://www.ieice.org/~cs-edit/magazine/number\\_63/197\\_kaiseturonbun/kaiseturonbun.html](https://www.ieice.org/~cs-edit/magazine/number_63/197_kaiseturonbun/kaiseturonbun.html)

## アダプテッドの視点から障害児者の運動支援を考える ～多様性を前提とした体育・スポーツの実践に向けて～

村上祐介

(順天堂大学スポーツ健康科学部)

本発表では、多様な人々を前提とした体育・スポーツの実践としてアダプテッド体育・スポーツ（以降、アダプテッド）の概念や実践例を紹介するとともに、小越氏によるAIとICFに基づく教育支援の内容と重ね合わせながら発展的な議論が行われた。筆者はこれまで、知的障害のある親子のレクリエーション活動や多様な発達特性のある子どもを対象とした運動教室などに、障害の有無に関わらず様々な子どもを対象に体育・スポーツの実践を行ってきた。それらの実践のほとんどは、既存のスポーツ活動をそのまま子ども達に提供するのではなく、目の前の子どもの特徴や状態に合わせて環境を工夫するアダプテッドの実践であった。アダプテッドの考え方は国内ではまだ発展途上であるが、国際的には歴史がある。しかし、その定義は国際的な学会と各地域学会（例えば、ヨーロッパ）においては若干ことなるところがあり、今後我が国においてもその定義や対象の範囲などについて検討が求められている。

アダプテッドの実践では、「その人」に合わせて試行錯誤が行われる。この点について小越氏の発表では、発達障害のある子どもの様々な生活の実際が紹介され、子どもの行動は周りの

環境や時間の経過に伴って常に変わっていくこと（「少しの環境の変化によって、さっきまでと全然違う姿を見せることがある」）が紹介されていた。この点は筆者が行っている日ごろのスポーツ活動でもしばしば経験することであり、だからこそ、目の前の子どもの状態に合わせて環境を調整していくアダプテッドの重要性を確かめることができた。

これまでのアダプテッドの研究では、実践や事例に関する報告が積み重ねられているが、現段階でそれらをまとめ、マニュアル化することには至っていない。多様な実態を想定したアプローチの新たな枠組みの構築にむけて今後の研究を進展させていきたい。また小越氏が指摘するように、個人特性への適合にとどまらず、参加環境や関係性を含めたアダプテッドの実践は先進事例が散見されるものの、対象集団相互の変化の機序やその有効性については今後さらなる検討の余地がある。本シンポジウムでは、ICFという共通した理論的枠組みから、AIを活用した実践や人が生み出す創造的な実践の重要性を再確認することができ、今後のアダプテッドの行方を考える上で大変貴重な機会となった。